

タイトル	翻訳と解説形態論：語構造の分析(2)
著者	上野，誠治； UENO, Seiji
引用	北海学園大学人文論集(54)： 27-60
発行日	2013-03-31

翻訳と解説 形態論：語構造の分析(2)

上 野 誠 治

0. はじめに

本稿は、上野(2012)「翻訳と解説 形態論：語構造の分析(1)」(『人文論集』第53号)の続編である。

(目次)

4.1 語と語構造

4.1.1 形態素

4.1.2 語構造の分析

4.2 派生

4.2.1 英語の派生接辞

4.2.2 2種類の派生接辞

(以上前号)

(以下本号)

4.3 複合

4.3.1 複合語の特性

4.3.2 内心複合語と外心複合語

4.3.3 他言語における複合語

4.4 屈折

4.4.1 英語の屈折

4.4.2 屈折と派生

4.4.3 他の屈折現象

4.5 他の形態論的現象

4.5.1 主に屈折と関連する過程

4.5.2 他の過程

4.6 形態音素論

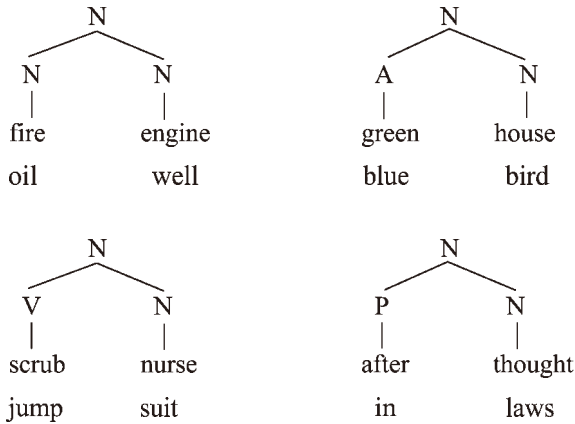
1. 翻訳と解説

第4章 形態論：語構造の分析

4.3 複合

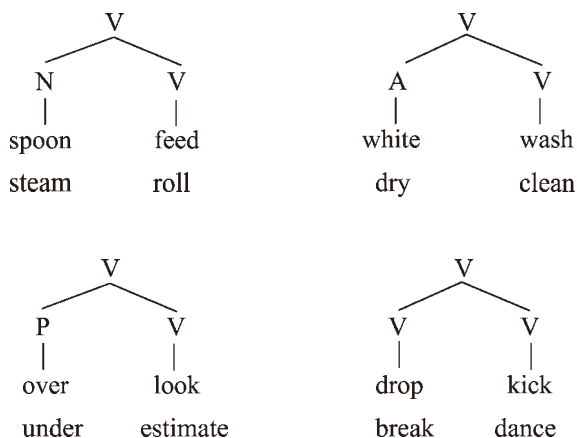
英語における語形成の、もう一つの一般的な方法に**複合**(compounding)がある。それは、既存の二つの語を結合する方法である(図4.9参照)。その結果生じる複合語はほとんど例外なく、名詞、動詞、または形容詞である。(考えられる複合前置詞の例には *into* と *onto* がある。)

名詞複合語 (noun compounds)¹



1 fire engine (消防車), oil well (油井), greenhouse (温室), bluebird (ルリツグミ), scrub nurse (手術室看護師), jump suit (jumpsuit と同、ジャンプスーツ), afterthought (あとからの思いつき), in-laws (義理の両親)

動詞複合語 (verb compounds)²



形容詞複合語 (adjective compounds)³

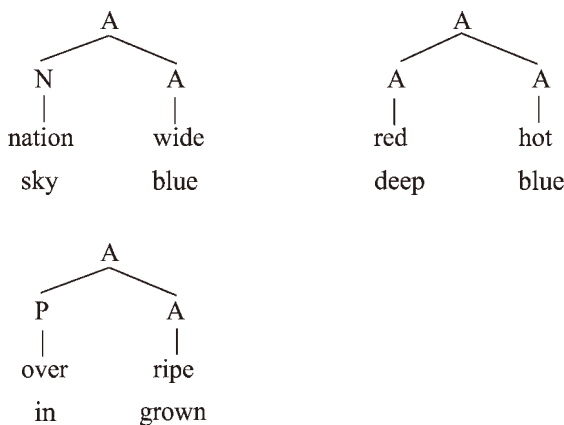


図 4.9 英語の複合語

- 2 spoon-feed (さじで食べさせる), steamroll (強引に進む), whitewash (うわべを飾る, ごまかす), dry-clean (ドライクリーニングする), overlook (見落とす), underestimate (過小評価する), drop-kick (ドロップキックする), break-dance (ブレイクダンスをする)
- 3 nationwide (全国的な), sky-blue (空色の), red-hot (灼熱の), deep blue (藍色の), overripe (熟しすぎた), ingrown (内向的な)

これらの複合語および、この種の他の複合語の大部分では、最も右側の形態素が語全体の範疇を決定する。たとえば、*greenhouse* は名詞であるが、それは最も右側の成分が名詞だからである。また、*spoonfeed* が動詞なのは、*feed* もまたその範疇に属するからであり、*nationwide* は *wide* と同様に形容詞である。語全体の範疇を決定する形態素は**主要部** (head) と呼ばれる。

複合語は一旦形成されると、図 4.10 が示すように、他の語と結合してさらに大きな複合語を形成することができる。

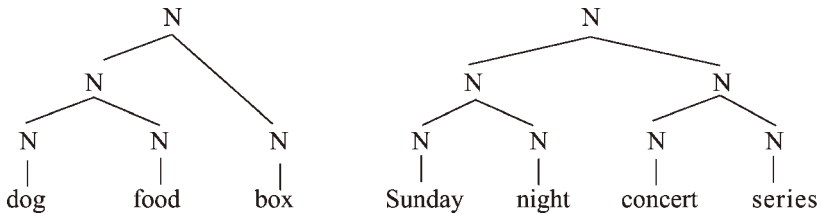


図 4.10 より小さな複合語から形成される複合語

さらに、複合は派生と相互作用して、*election date* (選挙日) のような形態を生じることも可能である。この場合、その複合語の最初の語は図 4.11 に示されるように、派生の結果生じたものである。

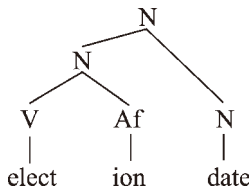


図 4.11 派生と複合の相互作用⁴

4 動詞 *elect* と接辞 *ion* の結合は派生、それによって形成された名詞 *election* と名詞 *date* の結合は複合である。

4.3.1 複合語の特性

複合語を表記する際の英語正書法は首尾一貫していない。複合語は単一語として書かれるときもあれば、ハイフンで繋いだり、別々の語として書かれることもある。しかし、発音に関しては、重要な一般性が見られる(表 4.11 参照)。特に、形容詞・名詞複合語には、その最初の成分に、より卓立した強勢 (more prominent stress) が置かれるという特徴がある⁵。対照的に、形容詞と名詞から構成されてはいるが複合語でない場合には、一般的に第 2 要素に強勢が置かれる⁶。

表 4.11 複合語 対 非複合語	
複合語	複合語ではない表現
greénhouse ⁷ 「ガラスで囲まれた庭園」	green hóuse 「緑色に塗られた家」
bláckboard 「黒板」	black boárd 「黒い板」
wét suit 「ダイバーの衣装」	wet suít 「濡れたスーツ」

英語の複合語に見られる際だった特徴の二つ目は、時制と複数を示す標識が典型的には第 1 要素には付加されない点である。ただし、複合語全体には付加することができる。(しかし、*swordsman* (剣士), *parks supervisor* (公園管理人) のような例外もいくつか存在する⁸。)

- (12) *The player [dropped kick] the ball through the goal posts.
The player [drop kick]ed the ball through the goal posts.
(その選手はボールをドロップキックしてゴールポストに入れ

5 複合語強勢規則 (Compound Stress Rule) と呼ばれる。
6 句強勢規則 (Phrasal Stress Rule) と呼ばれる。
7 強勢に関して、通常は, gréenhouse, hóuse, bóard のように表記されることが多い。
8 寺澤芳雄・編『英語語源辞典』(1997, 研究社)によれば, *swordsman* の -s は名詞の所有格語尾である。類例に, *kinsman*, *craftsman* がある。もし、この説明が正しければ、例外と言っても「時制と複数を示す標識」の例には当たらないことになる。

た。)

- (13) *The [foxes hunter] didn't have a licence.

The [fox hunter]_s didn't have a licence.

(そのキツネ狩りをする人たちは免許を持っていなかった。)

4.3.2 内心複合語と外心複合語

複合語は、英語において、広範囲に及ぶ意味関係を表すために用いられる。表 4.12 は、名詞・名詞複合語に見られるいくつかの意味パターンの例である。

表 4.12 名詞・名詞複合語		
例		意味
steamboat	(蒸気船)	「蒸気によって動力を供給される船」
airplane	(飛行機)	「空中を移動する輸送機関」
air hose	(空気ホース)	「空気を送出するホース」
air field	(飛行場)	「飛行機の着陸地」
fire truck	(消防車)	「消火するために使用される車両」
fire drill	(消防訓練)	「火事の時のための訓練」
bath tub	(風呂桶)	「入浴する場所」
bath towel	(バスタオル)	「水泳・入浴のあとに使うタオル」

ほとんどの場合、複合語はその主要部（最も右側の成分）によって表される概念の下位類 (sub-type) を表す。たとえば、*dog food* (ドッグフード) はある種の食べ物、*cave man* (穴居人) はある種の人間、*sky-blue* (空色の) はある種の青色、等々である。このような複合語は、表 4.12 のすべての例も含めて、**内心的** (endocentric) と呼ばれる。しかし、それよりも数の上では少ないが、複合語の意味がこの様に、それを構成する部分の意味から推測できない場合がある。たとえば、*redhead* (赤毛の人) はある種の頭のことでなく、赤い髪をした人のことである。同様に、*redneck* (労働者) は人であって、ある種の首のことではない。このような複合語は**外心的** (exocentric) と言われる。

英語の内心複合語と外心複合語との間の非常に顕著な相違は、時にその

主要部が *tooth* や *foot* のような不規則な複数形を持つ語の場合に見られることがある。この点に関して、表 4.13 の例を考察してみよう。

表 4.13 英語複合語の複数形	
内心複合語	外心複合語
wisdom <u>teeth</u> (親知らず)	saber <u>tooths</u> (食肉類の絶滅種) ⁹
club <u>feet</u> (湾曲足)	big <u>foots</u> (架空の生物；‘Sasquatch’) ¹⁰
policem <u>en</u> (警察官)	Watchm <u>an</u> s (携帯用テレビの一種) ¹¹
oak <u>leaves</u> (カシの葉)	Maple Leaf <u>s</u> (トロントの NHL ホッケーチーム) ¹²

内心複合語は通常の不規則な複数形 (*teeth*, *feet* など) を用いるが、外心複合語は *tooth*, *foot*, *man* のような語に対して複数の接尾辞 *-s* が使えることに注意されたい。

4.3.3 他言語における複合語

語（特に名詞）を複合させて、より複雑な語を作る操作は、世界の諸言語において、非常に一般的なものである。タガログ語のように複合語の左側の要素が主要部である場合を除いて、表 4.14 に示される諸言語はすべて最も右側の形態素が主要部となる複合語を持つ¹³。

9 剣歯虎 (saber-toothed tiger) のこと。

10 Big Foot：《時に b- f-》ビッグフット：米国とカナダの太平洋岸に近い山中に出るといわれる猿人 (Sasquatch, omah) の別名。(『ランダムハウス英語辞典』第2版、小学館)

11 ソニー・ウォッチマン：ソニーの携帯テレビ

12 トロント・メープルリーフス：カナダ・オンタリオ州トロントを本拠地とするアイスホッケーチーム。NHL=National Hockey League：北米のプロアイスホッケーリーグ

13 もしそうだとすると、表 4.14 の複合語は内心複合語ということになる。(注 15 参照。)

表 4.14 さまざまな言語における名詞複合語		
韓国語		
kot elum 真っ直ぐな 氷 「氷柱」	isul pi 露 雨 「霧雨」	nwun mwul 眼 水 「涙」
タガログ語		
balat sibuyas 皮 玉葱 「皮の薄い」	basag ulo 割れ目 頭 「格闘／喧嘩騒ぎ」	anak araw 子 太陽 「白子」 ¹⁴
ドイツ語		
gast-hof 客 宿 「ホテル」	Wort-bedeutungs-lehre 語－意味－理論 「意味論」	Fern-seher ¹⁵ 遠くで 見るもの 「テレビ」
フィンランド語		
lammas-nahka-turkki 羊 皮 外套 「羊の毛皮の外套」	elin-keino-tulo-vero-laki 生活の 手段 収入 税 法律 「所得税法」	
ツォツィル語 ¹⁶		
piŋ-xól 包む 頭 ¹⁷ 「帽子」	méʔ-kʼínobal 母 霧 「虹」	ʔóra-tjón 直ぐに 蛇 「死に至らしめる毒蛇」

14 先天性色素欠乏症の人。

15 「テレビ視聴者」という意味もある。この語は、本来「見る者」で人を指すが、テレビ受像機（映像を遠くで見る機械）に転用されたものと思われる。

16 メキシコのチアパス州（Chiapas）で話されるマヤ語族（Mayan languages）、 Chol・ツェルタル語派（Cholan-Tzeltalan）に属する言語。

17 原文では piŋ-xól に対して、wrap-head という逐語訳が付けられている。もしこれが内心複合語であり、しかもツォツィル語が右側主要部規則が適用される言語だとすれば（注 13 参照）、意味は「頭の一種（a kind of head）」になるはずであるが、実際の意味は「帽子（hat）」である。したがって右側の要素 xól が主要部であるとは考えにくい。むしろ「頭を包むもの」と

4.4 屈折

ほぼすべての言語は、単数 (singular) と複数 (plural) および現在 (present) と過去 (past) といった対比を持つ。そのような対比は、さまざまな種類の文法情報を示すために語形を変える**屈折** (inflection) の助けを借りて、しばしば表示される。(屈折接辞が付加される語基 (base) は語幹 (stem) と呼ばれることがある。)

4.4.1 英語の屈折

屈折は、ほとんどの場合、接辞付加 (affixation) によって表される。また、多くの言語(例えば、日本語、スワヒリ語、イヌクティット語、フィンランド語) には数十個の屈折接辞がある。英語は 8 つの屈折接辞 (すべて接尾辞) しか持たないので、それほど屈折の激しい言語ではない。表 4.15 には英語の屈折接辞が列挙されている¹⁸。

いう意味で「帽子」になると思われる。もしこれが正しければ、pij-xól は、英語の breakfast (「断食を破る食事」→「朝食」) や killjoy (「他人の喜びを台無しにする人」→「場を白けさせる人」) と同じ外心複合語ということになる。

- 18 (原注) 英語には 3 つの -ing 接辞がある。1 つは屈折接辞で、2 つは派生接辞である。屈折接辞の -ing は、*He is breathing* (彼は呼吸している) におけるように、動詞と結合して別の動詞を作る。一つの派生接辞は動詞と結合して名詞を作り (*The breathing of the runners* (走者の呼吸)), もう一つの派生接辞は動詞を形容詞に転換する (*The sleeping giant* (眠れる巨人))—表 4.6 参照。また、2 種類の -en/-ed 接尾辞もある。一つは表 4.15 で言及されている屈折接辞であり、もう一つは派生接辞である。後者は動詞を形容詞に転換し、次のような構造に現れることができるようになる。

- a. The *stolen* money (盗まれたお金)
- b. The *escaped* convict (脱獄囚)

表 4.15 英語の屈折接辞	
名詞	
複数の -s	the book <u>s</u>
所有格（属格）の -s	John's <u> </u> book
動詞	
三人称単数現在の -s	He read <u>s</u> well.
進行相の -ing	He is work <u>ing</u> .
過去時制の -ed	He work <u>ed</u> .
過去分詞の -en/-ed	He has eat <u>en</u> / stud <u>ied</u> .
形容詞	
比較級の -er	the small <u>er</u> one
最上級の -est	the small <u>est</u> one

英語の屈折のほとんどは接辞付加を伴うが、別の方法で屈折の対比を表示する語もある。これは動詞の場合に最も明白で、その内のいくつかは、(*am-was* や *go-went* のように) ある形式を別の形式で代用することによるか、またはさまざまな種類の内部変化 (*come-came*, *see-saw*, *fall-fell*, *eat-ate*)によって過去時制を示す。これらの過程については 4.5 節で詳細に考察する。

4.4.2 屈折と派生

屈折と派生は両者とも共通して接辞付加によって表示されるので、その区別が微妙となる場合がある。また、時には、ある特定の接辞がどちらの機能を持っているのか不明確な場合もある。屈折接辞と派生接辞を区別する手助けとして一般的に用いられる基準が 4 つある。

範疇変化

まず第一に、屈折は図 4.12 で示されるように、それが適用される語に見られる文法範疇も意味の種類も変化させることはない。

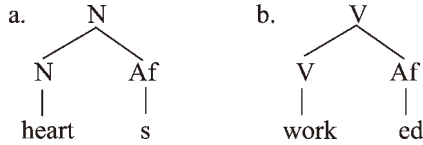


図 4.12 屈折の出力：屈折が示す語基の範疇と意味の種類のいずれにも変化がない

図 4.12a で複数の接尾辞 -s を付加することによって作られた形態はやはり名詞であり、語基と同じ種類の意味を持つ。たとえ *hearts* が単一のものではなく複数個のものを指すという点で *heart* とは異なるにしても、それが指す物の種類は同じままである。同様に、図 4.12b にあるような過去時制の接尾辞はその行為が過去に起こったことを示すが、その語は動詞のままであり、何らかの行為を示し続けている。

対照的に、派生接尾辞はその特徴として、それが適用される形式の範疇と意味の種類の両方またはいずれか一方を変化させる。図 4.13 に示される派生の例を考えてみよう。

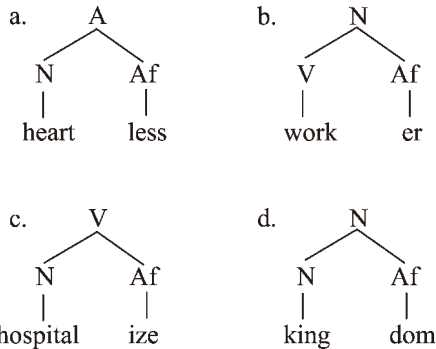


図 4.13 派生の出力：派生が示す語基の範疇と意味の種類の両方または、いずれか一方に変化があり得る

図 4.13 が示すように、-less は名詞から形容詞を作り、それが表す意味を物 (*heart* 「心」) から特性 (*heartless* 「心ない」) に変化させる。範疇と意

味の種類における同様の変化は、*-er* (動詞から名詞) や *-ize* (名詞から動詞) によってももたらされる。*-dom* の場合は事情が少し異なり、*kingdom* という語において範疇変化は引き起こさない。それは、その語基と派生語の両方がともに名詞だからである。しかし、*-dom* は実は意味の種類を (*king* 「王」を表す) 「人」から (*kingdom* 「王国」を表す) 「場所」へといくぶん変化させている。

順序

屈折接辞の2つ目の特性は、それが派生接辞に関して、どのような順序で語基と結合されるのか、ということと関係がある。図4.14が例示するように、派生接辞は屈折接辞より先に語基と結合しなければならない (IA = 屈折接辞, DA = 派生接辞)。

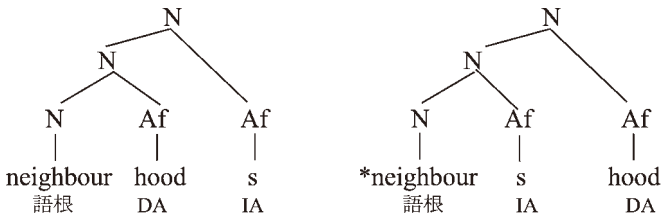


図 4.14 派生接辞と屈折接辞の相対的位置：派生接辞は語根により近くなければならない

これらの例において、屈折接辞を派生接辞の外側に配置するのは、屈折が派生の出力に適用されるという事実を反映したものである。

生産性

屈折接辞と派生接辞を区別する3つ目の基準は**生産性** (productivity), すなわち比較的自由に屈折接辞が適当な範疇の語基と結合できるという性質と関連がある。相対的に見て、屈折接辞には通常ほとんど例外というものがない。たとえば、接尾辞 *-s* は (*oxen* や *feet* などのいくつかの例外は別

として）複数形を許す事実上どんな名詞とも結合することが可能である。

対照的に、派生接辞は特徴として、限定された類の語基にしか適用されない。たとえば、*-ize* はある種の形容詞とだけ結合して動詞を形成することができる。

- (14) modern-ize *new-ize
 legal-ize *lawful-ize
 final-ize *permanent-ize

動詞の場合、事情はいくぶんやや複雑である。なぜなら英語の動詞の多くが、不規則な過去形 (*saw*, *left*, *went* など) を持つからである。それにもかかわらず、屈折接辞 *-ed* は *-ment* のような派生接辞と比較して、より一層一般的に適用できる。たとえば、表 4.16 の動詞はすべて規則的な過去時制の語尾を取ることができるが、上位 3 列までの動詞しか接尾辞 *-ment* を取れない。

表 4.16 動詞の語基と屈折接辞 <i>-ed</i> と派生接辞 <i>-ment</i> の適合性		
動詞	<i>-ed</i> との適合性	<i>-ment</i> との適合性
confine	confined	confinement
align	aligned	alignment
treat	treated	treatment
arrest	arrested	*arrestment
straighten	straightened	*straightenment
cure	cured	*curement

意味的透明性

最後に、屈折接辞が語の意味に与えるものは、通常まったく透明で一貫している。複数の接尾辞を付加すると「1 つより多い」(*cat-cats*, *tree-trees*) という意味を与え、過去時制の接尾辞を付加すると「現在より前」(*walk-walked*, *play-played*) という意味を与える、といった具合である。

派生の場合、状況は必ずしもそれほど簡単ではない。なぜなら語の意味

をそれを構成する要素から予測することが不可能な場合があるからである。*actor* (俳優) は演技 (*act*) する人であるが、*professor* (教授) は公言 (*profess*) する人のことではない。*teacher* という語はしばしば教職に就いている人を指すが、*walker* にはそのような含意はない。*government* は機関 (*institution*) (「政府の政治課題 (*the government's agenda*)」のように) を表すこともあれば、統治行為 (*the act of governing*) (「人民による政治 (*the government by the people*)」のように) を指すこともできる。しかし、*treatment* は最初の方の意味は持たない¹⁹。

4.4.3 他の屈折現象

屈折は非常に広く用いられる形態過程 (*morphological process*) であり、その影響はここで議論できる以上に遙かに多い現象に見られる。にもかかわらず、たとえ手短けではあっても、言及しておく価値のある補足的な現象が二つある。それらが世界の諸言語において重要なものであり頻繁に見られるものだからである。

格 (*case*) は、語の文法的役割 (主語、直接目的語など) を示すために語形の変化を伴うものである。単純な例が英語に見られる。すなわち、*he* という代名詞形は主語に用いられ、*him* という形は直接目的語に使われる。*I* と *me*, *she* と *her*, *we* と *us*, *they* と *them* にも類似の対比が存在する。

- | | |
|---|--|
| (15) He met the new professor.
↑
主語 | The new professor met him.
↑
直接目的語 |
|---|--|

一致 (*agreement*) は、ある語が、別の語の持つ文法的特性と適合するために屈折するときにかかるものである。特に一般的なものに、数 (*number*)

19 たとえば、*treatment* の「治療」という意味から「病院 (≡ 治療する場所)」という「機関」を表す意味はないということ。

の一致（単数と複数）や、人称（person）の一致（1人称一話し手，2人称一聞き手，3人称一それ以外の人）がある。この場合も，英語は単純な例を提供してくれる。すなわち，接尾辞 *-s* は，主語が3人称単数の時，現在時制の動詞に現れる。

(16) That man speaks French.

(接尾辞 *-s* がない *I speak French* や *They speak French* と比較されたい。)

ここで取り上げたものと，それ以外の屈折現象のより詳細な議論に関しては，コンパニオン・ウェブサイト (www.pearsoned.ca/ogradey) の第4章と第5章を参照²⁰。

4.5 他の形態論的現象

入門用のテキストでは，人間言語における語形成を引き起こすものとなる過程を網羅的に概観することは望めない。前節では最も一般的で中心的な過程に触れてきたが，他にも考察に値する過程がいくつかある。ここでは，これらを二つのグループ—主として屈折に関連するものと，それ以外の種類の現象を伴うもの—に分けることにする。

4.5.1 主に屈折と関連する過程

内部変化

内部変化 (internal change) は，次に挙げる表 4.17 における組み合わせで例証されるように，ある非形態素分節音 (non-morphemic segment) を別のもので代用し文法的対比を示す過程である。

20 コンパニオン・ウェブサイトでは，当該の書籍に関するより詳しい説明や，無料でダウンロードできるさまざまなリソースが提供されている。

表 4.17 英語における内部変化

s <u>i</u> ng (現在)	s <u>a</u> ng (過去)
s <u>i</u> nk (現在)	s <u>a</u> nk (過去)
d <u>r</u> ive (現在)	d <u>r</u> ove (過去)
f <u>oo</u> t (単数)	f <u>ee</u> t (複数)
g <u>oo</u> se (単数)	g <u>ee</u> se (複数)

sing, *sink*, *drive* のような動詞はその母音を変化させる(最初の 2 例では *i* から *a* へ) ことによって過去形を形成する。このように文法的対比を示す母音の交替を表すのに**アブラウト** (ablaut) という術語がしばしば用いられる²¹。

内部変化の中には、当該言語の初期段階に遡る音韻論的に条件付けられた (phonologically conditioned) 交替を反映するものもある。不規則な複数形 *geese* と *feet* はこのようにして生まれたものである。すなわち, *goose* や *foot* のような語における元の母音が, 古い複数の接尾辞における前母音 /i/ の影響で前舌化された (fronted) のである²²。その後, その /i/ は脱落した。英語や他のゲルマン諸語に見られるこの種の変化は**ウムラウト** (umlaut) として知られている²³。

- (17) *goose* の古い単数形: /gos/
 古い複数形: /gos-i/
 ウムラウト: /gœs-i/
 複数接尾辞の消失: /gœs/
 その他の変化(第 7 章参照) /ges/, その後 /gis/ 'geese' (「鷺鳥」)

21 日本語では「母音交替」などと訳される。英語では gradation となる。

22 「古い複数の接尾辞」とは *iz のことである。

23 日本語では「母音変異」などと訳される。英語では mutation となる。なお, アブラウトやウムラウトは元来ドイツ語なので, Ablaut, Umlaut のように大文字で表記されることもある。

内部変化は、いくつかの重要な点で接中辞化 (infixing) とは異なる。まず、表 4.4（前号 149 頁参照）のタガログ語の例によって示されるように、本物の接中辞が挿入される語基は典型的に当該言語のどこかに別個の形態として存在している (*sulat* 「書く」と *s-in-ulat* 「書いた」を比較されたい)。それに対して、英語における *foot/feet* や *sing/sang* のような交替の場合は状況がまったく異なっている。なぜなら、「より下方の末端」という意味の **ft* や「楽音でことばを産出する」という意味の **sng* といった形態がないからである。さらに、タガログ語の状況とは対照的に、内部変化があるときに交替する分節音は体系的にある特定の意味とは結びつけられず、したがって形態素とはみなされない。たとえば、*ran* の *a* や *drove* の *o* が一般的に英語において「過去」の意味を持たないのは、*geese* の *ee* が「複数」の意味を持たないのと同様である。

内部変化と接中辞化 (4.1.2 節) の存在は、語構造に関して重要な点を例証するものである。すなわち、形態論は必ずしも連結的 (concatenative) ではない、という点である。要するに、すべての語構造が付加的、線状的な方法で形態素を並べて作られるわけではないのである。

補充法

補充法 (suppletion) は文法的対比を示すために、ある形態素をまったく異なる形態素と置換する。英語におけるこの現象の例には、動詞 *go* の過去形として *went* を使ったり、*be* の過去形として *was* や *were* を使ったりする場合が含まれる（他のヨーロッパ諸語で見られる補充法については表 4.18 参照）。

表 4.18 ヨーロッパ諸語における補充法		
言語	基本形	補充形
フランス語	<i>avoir</i> 「持つ」	<i>eu</i> 「持った」
スペイン語	<i>ir</i> 「行く」	<i>fue</i> 「(彼 (女) は) 行った」
ドイツ語	<i>ist</i> 「である」	<i>sind</i> 「である」 ²⁴
ロシア語	<i>xorofo</i> 「良い」	<i>lutfse</i> 「より良い」

場合によっては、補充法と内部変化は区別することが難しい。たとえば、*think* の過去時制 (*thought*) や *seek* の過去時制 (*sought*) は補充法の例だろうか、あるいは内部変化の例だろうか。この種の交替はしばしば内部変化の極端な種類として扱われるが、**部分補充法** (partial suppletion) という術語を使う言語学者もいる。

重複

いくつかの言語で見られる一般的な形態過程に**重複** (reduplication) がある。それは文法的・意味的対比をそれが適用する語基のすべてあるいは一部を繰り返すことによって示すものである。表 4.19 に与えられたトルコ語とインドネシア語のデータにあるように、語基全体を繰り返すと**完全重複** (full reduplication) となる。

表 4.19 完全重複の例			
語基		重複形	
トルコ語			
tʃabuk	「速く」	tʃabuk tʃabuk	「とても速く」
javaʃ	「ゆっくり」	javaʃ javaʃ	「とてもゆっくり」
iji	「よく」	iji iji	「とてもよく」
gyzel	「美しく」	gyzel gyzel	「とても美しく」
インドネシア語			
orag	「人」	orag orag	「人々」
anak	「子」	anak anak	「子ども達」
mangga	「マンゴー」	mangga mangga	「マンゴー」(複数)

対照的に、**部分重複** (partial reduplication) は語基の一部だけを複製する。たとえば、表 4.20 のタガログ語のデータでは、最初の子音・母音連鎖 (consonant-vowel sequence) にだけ重複の影響が見られる。

24 ist は 3 人称単数現在形。sind は複数現在形であるが、2 人称については敬称の Sie と一致 (agree) する場合である。

表 4.20 タガログ語の重複			
語基		重複形	
takbo	「走る」	tatakbo	「走るだろう」
lakad	「歩く」	lalakad	「歩くだろう」
pili?	「選ぶ」	pipili?	「選ぶだろう」

英語は、*teeny-weeny* や *itsy-bitsy* のような指小表現 (diminutive expression) で、部分重複を限定的に用いている²⁵。しかし、これは屈折的対比 (inflectional contrast) とみなせるほど一般的なものではない。

声調の配置

モノ・ビリ語 (Mono-Bili, コンゴで話されている) では、過去時制と未来時制を区別するのに声調が用いられる。(表 4.21 で、高調 (high tone) は鋭アクセント (´), 低調 (low tone) は鈍アクセント (˘) で示されている)

表 4.21 モノ・ビリ語の過去と未来			
過去		未来	
dá	「たたいた」	dà	「たたくだろう」
zí	「食べた」	zì	「食べるだろう」
wó	「殺した」	wò	「殺すだろう」

4.5.2 他の過程

接語化

形態素の中には意味や機能に関して語のように振る舞うが、音韻論的理由から独立した形態として単独で生起することができないものもある。これらの要素は、**接語** (clitic) と呼ばれるが、必ず別の語 (**ホスト** (host) として知られる) と一緒に発音されなければならない²⁶。その良い例が英語

25 とともに「ちっちゃな」という意味。

26 host は、寄生生物の寄生相手という比喩から、「宿主」という訳語も考えら

に見つけられるが、そこではある動詞の形態が、もはや音節を構成することがないために単独では生起できない縮約された異形 (*am* を表す *'m*, *is* を表す *'s*, *are* を表す *'re*) を持つ。接語化は先行する語にこれらの要素を付加することで生起する。

- (18) a. *I'm leaving now.* (私は今出かけるところだ。)
 b. *Mary's going to succeed.* (メアリは成功するだろう。)
 c. *They're here now.* (彼らは今ここにいる。)

接語化はフランス語でも一般的で、一連の強勢が置かれない目的語の接語代名詞 (clitic object pronoun) がある。それらは動詞に付加されなければならない。動詞と接語代名詞の二つは、まるで単一語を形成しているかのように発音される。

- (19) Jean *t'aime.* Suzanne *les voit.*
 John you-likes Suzanne them-sees
 'John likes you' 'Suzanne sees them'

ホストの末尾に付加する接語は**前接語** (enclitic) と呼ばれる。また、(フランス語の例のように) ホストの先端に付加する接語は**後接語** (proclitic) として知られている²⁷。

接語化の影響は表面的には接辞付加と類似するところがあるかもしれない。なぜなら、いずれの場合も独り立ちできない要素が語基に付加されて

れるかもしれない。その場合、接語が寄生物ということになる。

- 27 要するに、前の語と結びつく場合が前接語で、後ろの語と結びつく場合が後接語である。下の図で、 がホスト。

 + 前接語 (例) *Mary's* ← *Mary* + *'s*
 後接語 + (例) *t'aime* ← *t'* + *aime*

いるからである。重要な相違は、接語が、一接辞とは違って一動詞、名詞（または代名詞）、前置詞といった語彙範疇（lexical category）の構成要素（member）である点である²⁸。

転換

転換（conversion）とは、既存の語を新たな統語範疇に割り振る過程のことである。転換が接辞を付加しなくても、それはしばしば一種の派生と考えられることがある。なぜなら、転換によって範疇や意味の変化がもたらされるからである。このため、転換は時に**ゼロ派生**（zero derivation）とも呼ばれる。表 4.22 は、英語において最も一般的な三種類の転換例である。

やや特殊な転換によって、形容詞から名詞（*the poor*「貧しい人々」、*gays*「同性愛者」）が、さらには前置詞から動詞（*down a beer*「ビールをすばやく飲む」、*up the price*「価格を上げる」）が作られることもある。

表 4.22 転換の例		
名詞から派生した動詞	動詞から派生した名詞	形容詞から派生した動詞
ink (a contract) (契約書に署名する)	(a long) run (長期興行)	dirty (a shirt) (シャツを汚す)
butter (the bread) (パンにバターを塗る)	(a hot) drink (温かい飲み物)	empty (the box) (箱を空にする)
ship (the package) (荷物を船便で発送する)	(a pleasant) driver (愉快な運転手)	better (the old score) (前の成績より良くなる)
nail (the door shut) (ドアに釘を打って閉じる)	(a brief) report (手短な報告)	right (a wrong) (不正を正す)
button (the shirt) (シャツのボタンをかける)	(an important) call (重要な電話)	total (a car) (車を完全に破壊する)

28 具体的には、動詞の例としては 'm (< am) や 's (< is), 代名詞の例としては 't (< te) や les が挙げられる。(19)にあるように、les voit は単一語のように発音される。前置詞の例としては kinda (< kind of) の a や have to の to が該当すると思われる。have to の場合も単一語のように [hæftə] (子音の前) あるいは [hæftu] (母音の前) と発音される。

転換は通常、単一の形態素を含む語に限定される。ただし、*refer-ee* (名詞から動詞への転換、「レフェリーを務める」) や *dirty* (形容詞から動詞への転換、「汚す」) のような例外もいくつか存在する²⁹。

2 音節語における転換はしばしば、英語では強勢の移動を伴う。表 4.23 の例が示すように、動詞の場合は最後の音節に強勢が置かれるのに対して、対応する名詞では最初の音節に強勢が置かれる。(ここでは強勢を'によって表示する。)

表 4.23 英語における強勢配置			
動詞		名詞	
implánt	(移植する)	ímplant	(移植)
impórt	(輸入する)	ímpor	(輸入)
présént	(贈る)	présent	(贈り物)
subjëct	(服従させる)	súbjêct	(臣下)
contést	(競う)	cóntest	(競技会)

刈り込み

刈り込み (clipping) とは、多音節語を 1 音節以上削除することで短縮する過程のことである³⁰。刈り込みによって作られるもので最も一般的なものに名前がある—*Liz*, *Ron*, *Rob*, *Sue* など³¹。刈り込みはあまり形式張らない話し方で特に用いられる。そこでは、刈り込みによって *professor* の代わりに *prof*, *psychology* には *psych*, *influenza* には *flu*, *doctor* には *doc*, *hamburger* には *burger* のような語形が作られている³²。しかし、*ad*, *auto*,

29 referee や dirty は本文に示されているように、2 つの形態素からなる語であるが、前者は名詞から動詞に、後者は形容詞から動詞に転換することが可能である。

30 「省略」と訳されることもある。

31 それぞれ、Elizabeth, Ronald, Robert, Susan などから刈り込みによって作られたものである。

32 刈り込みでは、語の前部または後部が削除されるのが一般的であるが、flu や Liz は前後部の両方が刈り込まれた場合の例である。そのほかに detec-

lab, *sub*, *deli*, *porn*, *demo*, *condo* などの刈り込まれた語形は一般的な使用においても容認されている³³。

ことばの問題 びっくりするかもしれない刈り込みの例

zoo < zoological garden (動物園)

fax < facsimile (ファックス)³⁴

fan (スポーツの) < fanatic (熱狂的な愛好者→ファン)

van < caravan (屋根付き貨物運搬車→乗用バン)

vegan < vegetarian (菜食主義者)³⁵

mob < mobile crowd (変わりやすい大衆→暴徒) (諸説によれば)

最近の興味深い短縮語 (clip) に *blog* があるが、これは、さまざまな出来事、感想、リンクに関する、ウェブサイトを基盤とした個人的な日記を表す *Web log* に由来するものである。刈り込みによって、いったん *blog* と

tive (探偵) から *tec* が, refrigerator (冷蔵庫) から *fridge* が作られる。なお、後者は刈り込みだけでは, *frig* あるいは *frige* となるため、実際の発音に合わせて *d* が挿入された特殊な事例である。ただし, *frig* と綴って [frɪdʒ] と読ませることもあるようである。

- 33 それぞれ刈り込まれる前の語形は, advertisement (広告), automobile (自動車), laboratory (実験室), submarine (潜水艦など), delicatessen (調理済み総菜販売店), pornography (ポルノ), demonstration (デモ), condominium (分譲アパート)。
- 34 facsimile の後部を削除してできる *facs* を発音にに応じてつづりを *fax* と変化したもの。
- 35 *vegan* は絶対菜食主義者 (卵, チーズ, 牛乳なども採らない) を表し, 元の *vegetarian* よりも狭い意味を持つ場合がある。また, これは *veg-etarian* の中央部分が刈り込まれた特殊な事例である。他に, *recce* (< *reconnaissance* (偵察)), *chaps* (< *chaparajos* (カウボーイの革ズボン)), *gents* (< *gentlemen's*) などがある。日本語にも, 「きもい」 (< きもち悪い) や 「むずい」 (< むずかしい) などの表現が若者の言葉遣いに見られる。

いう語が作られると、すぐに複合語にも現れるようになり (*blog archive*「ブログ書庫」, *blog template*「ブログ・テンプレート」), さらには動詞に転換されている (‘things to blog about’「ブログに書く事柄」のように)。この動詞は次に派生の適用を受け、その結果、名詞 *blogger* (ブロガー) が生じている³⁶。アメリカ方言学会 (American Dialect Society) の 2003 年度の大会で、*blog* が今後最もよく使われる可能性のある新語 (the new word most likely to succeed) に選ばれたのも無理からぬ事である。

混成語

混成語 (blend) は、2 つの既存の語彙項目の非形態素部分から作られる語である。通常は、ある語彙項目の最初の部分と他方の最後の部分から作られる。よく知られている例に *breakfast* と *lunch* に由来する *brunch* (朝食を兼ねた昼食), *smoke* と *fog* からの *smog* (スモッグ, 煙霧), *motor* と *hotel* からの *motel* (自動車旅行者用ホテル), *telephone* と *marathon* からの *telethon* (長時間テレビ放送, 24 時間テレビ), *aerobics* と *exercise* からの *aerobicise* (エアロビクス体操をする), *channel* と *tunnel* からの *chunnel* (英仏海峡トンネル, 英国とヨーロッパ本土をつなぐ水中連結路), *information* と *commercial* からの *informercial* (商品に関する情報満載のコマーシャル) がある³⁷。2007 年 7 月にメリアム・ウェブスター社 (Mer-

36 ブロガーとは、インターネット上で自分の日記を公開している人のこと。

37 本文で挙げられている例の中で、*telethon* と *aerobicise* にはやや問題がある。

まず、*telethon* について、本文では *telephone* と *marathon* に由来すると説明されているが、正しくは *telephone* ではなく *television* であると思われる。*The American Heritage Dictionary of the English Dictionary*, 3rd. ed. でも ‘A lengthy television program to raise funds for a charity.’ (「慈善基金を集めるための長時間テレビ番組」) と定義されている。ただし、この辞書ではその語源を ‘tele- + (mara)thon’ としており、*telethon* の *tele-* が *television* の一部とは必ずしも言っていない。

riam Webster) という辞書出版メーカーが、次回の版に新しい混成語—*gigantic* と *enormous* に由来する *ginormous* (とてつもなく大きい)—を追加する予定であることを発表している³⁸。

日本語、韓国語、標準中国語 (Mandarin) では、大学の名前に混成がよく使われる。

- (20) a. Korea Tayhakkyo > Kotay
Korea University (高麗大学)
b. Tōkyō Daigaku³⁹ > Tōdai
Tokyo University (東京大学)
c. Beijing Da Xue > Bei Da
Beijing University (北京大学)

時に、ある語のすべてと別の語の一部を結合するという点で、複合と混

また、『ランダムハウス英和大辞典』第2版 (小学館) は -athon という形態素を認定し「長時間イベント[番組, 販売], 持久力くらべ: walkathon, readathon. (また -a-thon, -thon)」と定義している。このように、もし -athon あるいはその異形の -thon が接尾辞の形態素であるとするれば, talk, walk, read, tele- はいずれも形態素であるので, talkathon, walkathon, readathon, telethon は2つの形態素から構成されることになり, 本文で混成語の定義として述べられている「2つの既存の語彙項目の非形態素部分から作られる語」という説明とは合致せず, 混成語とは言えなくなるかもしれない。

aerobicise については, 通常 aerobicize と綴られる。Oxford English Dictionary, Second Edition on CD-ROM (v.4.0) ではその語源に関して次のように記述している。‘aerobic *adj.* + -ize *suffix*, probably after exercise *v.*’ もしそうだとすると, aerobicise または aerobicize の場合も, 定義上, 混成語とは言えないかもしれない。

38 ginormous [dʒaɪnɔːrməs]

39 原文では Daigakku と書かれているが, 正しくは Daigaku であろう。

成の境界線上にある過程によって語が形成される場合がある。英語におけるこの種の例として, *email* (電子メール), *perma-press* (耐久プレス加工), *workaholic* (仕事中毒), *medicare* (高齢者向け医療保障制度), *guesstimate* (当て推量), *threepeat* (三連勝, 3年連続優勝を指してスポーツファンに使われる) がある⁴⁰。blogでさえもこの過程に参入してしまっている—*blogma* (独断に満ちたブログ) は *blog* と *dogma* (独断) の混成である⁴¹。

ことばの問題 多くの話者にあまり知られていない混成語起源の語

bit (コンピュータ科学における情報の単位) < binary + digit (ビット)
 modem < modulator + demodulator (モデム)
 napalm < naphthenic + palmitic (ナパーム)
 quasar < quasi + stellar (準星, クエイサー)
 chortle < chuckle + snort (声を立てて笑う)⁴²
 spam (サンドイッチミート) < spiced + ham (スパム)⁴³

40 それぞれ, e(lectric)+ mail, perm(anent)+ press, work + (alch)oholic, medi(cal)+ care, guess + (es)timate, three + (re)peat から作られたもの。ただし, workaholic の場合は, -oholic が -aholic に変化して結合している。

41 blogma は blog + (dog)ma から作られている。『アーバン・ディクショナリー』 (*Urban Dictionary*, www.urbandictionary.com) には 'Referring to the content of any blog, especially content that contains annoyingly strong opinions stated as facts.' (「ブログの内容, 特に, 事実のように述べられる煩わしいほど強い意見を含む内容を指して」) と説明されている。

42 Lewis Carroll の *Through the Looking-Glass* (1871) 中の造語。

43 「米国と英国の主に豚肉製の罐入りランチョンミート」(『ランダムハウス英和大辞典』第2版, 小学館) なお, ランチョンミートとサンドイッチミートは同義。



逆成

逆成 (backformation) とは、当該言語におけるある語から本物もしくはそう考えられる接辞を取り除くことによって新しい語を作る過程の事である。resurrect (生き返らせる) は元来 resurrection からこのようにして形成されたものであった。英語におけるその他の例として、enthusiasm から作られた enthuse (熱中する)、donation からの donate (寄贈する)、orientation からの orient もしくは orientate (適応させる)、self-destruction からの self-destruct (自滅する) がある。

時に、逆成はある語の形態に関して誤った仮定を伴っている場合がある。たとえば、pea (エンドウ豆) という語は単数名詞 pease から派生したものであるが、その最後の /z/ が複数を表す接尾辞と誤解されたことによるものである⁴⁴。

英語において、-or や -er で終わる語は逆成を非常に受けやすかった。何百とあるこのような語 (runner, walker, singer など) は接辞付加の結果作られたものであるから、この形態の語はどんなものでも動詞 + er の結合と理解される可能性が高い。editor, peddler, swindler はまさにこの方法で (誤って) 分析された結果、表 4.24 で示されるように、edit, peddle, swindle といった動詞が作り出されることになったのである。

表 4.24 逆成の例		
元の語	誤分析	逆成によって形成された動詞
editor (編集者)	edit + or	edit (編集する)
peddler (行商人)	peddle + er	peddle (行商する)
swindler (詐欺師)	swindle + er	swindle (詐取する)

この種の逆成でごく最近のものに動詞 lase (レーザー光を当てる) がある⁴⁵。この語は laser から逆成によって作られたものであるが、それ自体独

44 pease は古い語形もしくは方言形。なお、pease-pudding (豆と卵で作るプディング；肉料理のつけあわせ) という語がある。(『ジーニアス英和辞典』第4版。大修館書店)

45 1962 年初出である。

特の起源を持つものであった（下記参照）。

逆成は、現代英語において新しい語を生み出し続けている—*aggress*（攻撃する, *aggression* から）, *allegate*（言いつける, *allegation* から）, *liaise*（連絡をつける, *liaison* から）, *administrat*（治める, *administration* から）, *liposuct*（脂肪を吸い出す, *liposuction* から）は皆、最近になって私たちの注意を引くようになったものである⁴⁶。

頭字語と頭文字語⁴⁷

頭字語 (acronym) は、句や呼称 (title) の中の（いくつかまたはすべての）語の頭文字 (initial letter) をとって、それらを一語のように発音することによって形成されるものである。この種の語形成は組織名や軍事用語、科学用語で特に一般的である。よく知られている例に、国連国際児童緊急

46 *allegate* はまだ通常の辞書には記載されていないようである。『アーバン・ディクショナリー』には、*allegating* の項で以下のような定義と例文が載っている。

‘The act by which someone makes an allegation about you, especially to your boss, with the primary intent just to get you in trouble’（誰かがあなたに関して申し立てを、特に上司に対して、する行為。あなたをちょっと困らせようという第一義的な意図が込められている）

She was alleging against me to the boss and said I didn't show up on time. She's always trying to bring the heat on me!（彼女が私のことを上司に、時間通りに来ないと言いつけたんだ。そうやって彼女はいつもプレッシャーをかけようとするんだ。）

また、*liaise* と *liaison* に関しては、原文では *liase* と *liason* となっているが、明らかに誤植と思われる。

liposuction は「脂肪吸い出し術：余分の脂肪塊を皮下に挿入したパイプで吸い出して取り除く方法」（『ランダムハウス英和大辞典』第 2 版、小学館）

47 本書では、頭字語 (acronym) と頭文字語 (initialism) が区別されているが、一般にはひとまとめにして扱われることも多い。後者は、特に「字母読み」するものを指す。

基金 (United Nations International Children's Emergency Fund) を表す UNICEF, カナダ国際開発局 (Canadian International Development Agency) を表す CIDA, 北大西洋条約機構 (North Atlantic Treaty Organization) を表す NATO, 後天性免疫不全症候群 (acquired immune deficiency syndrome) を表す AIDS がある⁴⁸。

頭字語は、プリンス・エドワード島 (Prince Edward Island) を表す PEI, アメリカ合衆国 (United States of America) を表す USA のような**頭文字語** (initialism) と区別することができる。それらは一語というよりは、むしろ一続きの文字として発音される。その中間的なものに CD-ROM があるが、これは頭文字語の CD (*compact disk*) と頭字語の ROM (*read-only memory* 「読み出し専用メモリ」) からなる表現である。

話者が、自分の語彙の中の語で、それが頭字語に起源があることを知らない場合もある。この種のもので一般的に使われる 3 語に *radar* (レーダー, *radio detecting and ranging* 「電波探知測距」から), *scuba* (スキューバ, *self-contained underwater breathing apparatus* 「自給式水中呼吸装置」から), *laser* (レーザー, *light amplification by stimulated emission of radiation* 「輻射の誘導放出による光増幅」から) がある。

擬声語

すべての言語には、命名されたものと同じ発音に聞こえるように作られた語がいくつかある。英語におけるそのような**擬声語** (onomatopoeic word) の例に, *buzz* (ブーンという音), *hiss* (シューツという音), *sizzle* (シューシューという音), *cuckoo* (カッコー) がある。擬声語は聞こえてくる音の正確な音声学的複写ではないので、その形態は表 4.25 に示されるように言語によって異なることがある。

48 CIDA [sɪːdə], NATO [néitou]

表 4.25 さまざまな言語における擬声語		
英語	日本語	タガログ語
cock-a-doodle-doo	kokekoko (コケコッコ)	kuk-kukaok
meow	nyaa (ニャー)	ngiyaw
chirp	pii-pii (ピーピー)	tiririt
bow-wow	wan-wan (ワンワン)	aw-aw

英語は、他の言語に見られる擬声語に対応する表現を必ず持つというわけではない。たとえば、アサバスカ語 (Athabaskan) のひとつであるスレイビー語 (Slavey) には、野営地 (camp) から遠くないところで人に見られることなく歩いているクマの音を表す *sah sah sah*, ナイフが木に当たる音を表す *ðik*, 卵が割れて飛び散る音を表す *tlóðtʃ* のような擬声語がある⁴⁹。

新しい語の他の源

時に、語がゼロから作られる可能性もある。この現象は、造語 (word manufacture または coinage) と呼ばれるが、特に、*Kodak*, *Dacron*, *Orlon*, *Teflon* などの製品名の場合によく見られる⁵⁰。(あとの三つの語に見られる *-on* が科学的な響きを持つことに注意されたい。この種の接辞が *phenomenon* (現象), *automaton* (自動機械) などのギリシア語起源の語によく現れるからかもしれない。)

49 *tlóðtʃ* は日本語の「バチャ、バシャ、ピチャ」などに対応する音である。日本語では、語頭の音は /b/ または /p/ であるのに対して、スレイビー語では /t/ である。いずれも閉鎖音であるところが共通点である。なお、/l/ は無声歯茎側面摩擦音 (voiceless alveolar lateral fricative)。また、/tʃ/ は破擦音 (affricate) になっている。この側面開放を伴う破擦音を、日本語のキあるいはチの子音として用いるまれな存在に安倍晋三総理大臣がいる (神山孝夫『ロシア語音声概説』研究社、p.37)。

50 *Dacron* はポリエステル系合成繊維、*Orlon* はアクリル系合成繊維。*Kodak* と *Teflon* は商標名。

また、新しい語が時々、表 4.26 に列挙されているような名前から作られる場合もある。このような方法で作られる語は^{なおや}名祖 (eponym) と呼ばれる⁵¹。

表 4.26 名前から作られた英単語 ⁵²	
語	人名
watt (ワット)	James Watt (19 世紀後半の科学者)
curie (キュリー)	Marie and Pierre Curie (20 世紀初頭の科学者)
fahrenheit (カ氏)	Gabriel Fahrenheit (18 世紀の科学者)
boycott (ボイコット)	Charles Boycott (19 世紀アイルランドの土地管理人。地代の値下げを拒否したために排斥された。)

さらに、商標名 (brand name) が有名になったため、関連する製品を表す総称として、それが通用する場合がある。化粧紙 (facial tissue) を表す *Kleenex* や写真複写 (photocopy) を表す *Xerox* の二つは明らかにこの例である。

最後に、第 7 章でより詳細に見ることになるが、言語は新しい語を求めて他の言語に目を向けることがよくある。英語はこれまで、常にこの種の借用 (borrowing) に対して門を開いてきており、多くのさまざまな源から新しい語を吸収し続けている—イタリア語から latte (エスプレッソ・ラテ)、中国語から feng shui (風水)、アラビア語から al-qaeda (アル・カイダ、国際イスラム戦線) など⁵³。

51 エポニムとも呼ばれる。発見 [発明] 者の名前に因んだ語のこと。

52 ワットは電力の単位。キュリーは放射能の強さを表す単位。カ氏は水の氷点を 32 度、沸点を 212 度とする温度目盛りで、°F と表記される。ちなみに、°C はセ氏 (Anders Celsius) から。

53 al-Qaeda と表記されることが多い。

ことばの問題 些細な問題—英語で一番長い語は何か

それは、

ANTIDISESTABLISHMENTARIANISM (28 字) (国教廃止条例反対論)
(教会と国家の関係を廃絶することに反対する信念) か？

それとも、

SUPERCALIFRAGILISTICEXPIALIDOCIOUS (34 字) (素晴らしい)
(「とても見事な」ディズニー映画『メリー・ポピンズ』から) か？

違う！どの辞書を見ても、英語で最長の語は、

PNEUMONULTRAMICROSCOPICSILICOVOLCANOCONIOSIS
(45 字。‘... koniosis’ とも綴られる。) (塵肺症：ケイ酸を含む火山塵の粒子
を吸い込むことによって引き起こされる肺疾患) である。

4.6 形態音素論

第3章で見たように、語の発音は多くの場合、音素が生起する特定の音声的文脈の影響を受けやすい。たとえば、鼻子音 (nasal consonant) の前に生起する /æ/ は鼻音化されたり (たとえば, [kæ̃nt] ‘can’t’ と [kæt] ‘cat’), また、有声子音 (voiced consonant) の前に生起する /æ/ は無声子音 (voiceless consonant) の前に生起するものより長くなったりする (たとえば, [hæ:d] ‘had’ と [hæt] ‘hat’)。このような現象の研究は**形態音素論** (morphophonemics) または**形態音韻論** (morphophonology) として知られている。

形態音素論的な現象は、言語においては非常に一般的なものである。英語の有名な例として、複数の接尾辞 -s の発音の仕方が挙げられる。第1章で指摘したように、この形態素は [s], [z] または [əz] と発音される可能性がある。

- (2) lip[s]
pill[z]
judg[əz]

この交替には正当な理由がある。すなわち、無声の $[-s]$ は ($[p]$ のような) 無声音の後に生起し、 $[-z]$ は ($[l]$ のような) 有声音の後に生起する。また、 $[-əz]$ 形は、そうしなければ許されなくなってしまう子音連結 (consonant cluster) (英語には $[dʒz]$ という尾子音で終わる音節は存在しない) を分断するために、母音が必要とされるときに限って現れる。しかし、さしあたり重要な点は、どのような状況でこうしたことが起こるのか、ということと関係がある。これは、二つの理由から、形態音素の交替の古典的な例である。

第一に、この交替は形態素境界 (morpheme boundary) で生起する⁵⁴。そこでは、ある特定の種類の接尾辞が語基に付加される。英語では、 $[l]$ の後で $[s]$ を発音することは、両者が同一の形態素内にあるときには、まったく可能である—*else* のような語におけるように⁵⁵。しかし、複数の形態素 $-s$ は、*pill*- $[z]$ で起こるように、 $[l]$ で終わる語基に付加されるときには、 $[z]$ と発音されなければならない。

第二に、この交替は別々の音素— $/s/$ と $/z/$ —と結びつけられる音に関与する。この点において、前章で考察した、同一音素の異音 (allophone) に関与する交替とは異なる⁵⁶。

54 後述されるように、*pill*- s では、複数の形態素 $-s$ が $[z]$ と発音される、つまり想定される $[s]$ が $[z]$ に交替する現象は、*pill* という形態素と $-s$ という形態素の境界で起こっている。

55 *else* は $[éls]$ と発音されるので、 $[l]$ と $[s]$ が両方とも一つの形態素内にあることになる。

56 例えば、*top* と *stop* を比較した場合、同一音素 $/t/$ がそれぞれ $[t^h]$ と $[t]$ の異音として発音される。一方、*lips* と *pills* の場合は、複数の形態素 $\{s\}$ は前者では $/s/$ 、後者では $/z/$ というように別々の音素となり、最終的にはそれぞれ $[s]$ 、 $[z]$ と発音される。図式化すると以下ようになる。

(i) $/t/op \rightarrow [t^h]op$
 $s/t/op \rightarrow s[t]op$
(ii) $lip\{s\} \rightarrow lip/s/ \rightarrow lip[s]$
 $pill\{s\} \rightarrow pill/z/ \rightarrow pill[z]$

形態音素論に関するより詳細な議論については、www.pearsoned.ca/ograde を参照されたい。